

# 第三者意見

麗澤大学経済研究科  
教授 高 巖 氏



昨年度の第三者意見の結びで、筆者は第一生命に対し、期待を込めて「社会の利益を考えて行動することが、実は、株主の利益にかなうということ、実践をもって証明してもらいたい」と述べた。その視点から見れば、今年の報告書には、証明しようとする「会社としての強い意志」が感じられる。

過去3年間、第一生命は、金融危機や東日本大震災に伴う困難を経験してきた。しかし、それはただ漫然と事が収まるまで耐え忍んだということではない。第一生命は、<sup>かん</sup>難辛<sup>なん</sup>苦を経て自らの成長基盤を確実に強化してきた、と言うべきであろう。進化には「いかなる種も、さらなる飛躍を目指すには、一旦、元へ戻らなければならない」「進化の袋小路から抜け出すには、原点に回帰しなければならない」という鉄則がある。これまで、第一生命が経験したことは、まさにこれだったのではないだろうか。過去数年にわたり、第一生命は自社のあるべき姿を問い続けた。行きつ戻りつしながら、試行錯誤を繰り返した。答えを見いだすきっかけは、2011年3月、東日本を襲った震災であった。

自ら被災しながらも、多くの営業職員は気持ちを奮い立たせ、お客さま第一で避難所を回り、契約者やその関係者を捜し続けた。家族、お客さま、仲間を亡くした失意の中で、家も故郷もかつての姿を消した深い悲しみの中で、営業職員は、涙をこらえ立ち上がり、前を向き、行方不明のお客さまを捜し続けた。彼らの懸命な姿を目の当たりにし、職位・職種を越え、グループ全員が心を動かされ、「保険の何たるか」をこれまで無かったほど真剣に考えることとなった。そして、導きの手に引かれるかのように、第一生命グループは、1つ

の信条「安心の絆」にたどり着いた。筆者は、第一生命の原点回帰をこのようにとらえている。

進化の鉄則に関しもう1点付け加えれば、元に戻った種は、成長への潜在力を一気に膨らませるということである。企業でいえば、謙虚さと勇気をもって、原点に回帰した組織体は、次なる成長に向けてエネルギーを<sup>じゅういつ</sup>充溢させる、ということだ。すでに第一生命には会社としての強い意志が感じられると述べた。それは、原点回帰を経たことで次なる成長へのエネルギーを大きく膨らませたと確信するからである。本報告書では、2012年度で終わった中期経営計画を「成長への基盤固め」と総括し、2013年度より始まる中期経営計画を「更なる飛躍への挑戦と持続的成長の実現」と位置づけている。

その中で保険販売や保険金給付といった従来型ビジネスにとどまらず、持続可能性を高めるためのビジネスを積極的に推進するとの方針が示されている。日本で培ったノウハウを活かし、海外保険事業を拡大していくこと、会社資産30兆円を誇る機関投資家としてリスクとチャンスを合理的に試算し、グローバル投資を拡大していくこと。これらは、さらなる飛躍を目指す第一生命の具体的な挑戦の柱となっている。ぜひとも、これに挑み輝かしい成果を出してもらいたい。持続可能な社会の構築を目指す企業が株主利益にもかなうこと。これを証明することは、実は、ほかの何よりも大きな社会貢献となるからである。

## 第三者意見を受けて

第一生命では、今年度から新しい中期経営計画をスタートしたことに合わせ、この「第一生命の絆」報告書もイメージを一新し、そして当社の社会課題解決に向けたDSR取り組みについて、ステークホルダーの皆さまへ特にお伝えしたいことにポイントを絞ってご報告をしています。

昨年度から引き続き、高先生から貴重なご意見を頂戴しました。「従来型ビジネスに留まらず、国内外で果敢に挑戦をし、成果を残すことがステークホルダーの皆

さまへの貢献となり、さらには持続可能な社会の構築への貢献となる」ことを意識し、より一層の努力とともに、ステークホルダーの皆さまへ価値を提供すべく、DSR経営のさらなる推進に取り組んでまいります。

第一生命保険株式会社  
執行役員  
武富正夫

